

山口の西田幾多郎

著者	横田 理博
雑誌名	電気通信大学紀要
巻	27
号	1
ページ	15-35
発行年	2015-02-27
URL	http://id.nii.ac.jp/1438/00006831/

山口の西田幾多郎

横田 理博

第一章	職場と住居
第二章	日記
第三章	書簡
第四章	論文

のちに禅の立場と西洋哲学とを統合した独特の思想を紡ぎ出していくことになる西田幾多郎（一八七〇～一九四五年）は、明治三十（一八九七）年九月に山口高等学校に赴任し、明治三十二（一九〇九）年七月に金沢の第四高等学校に転任する。山口時代は二十七歳から二十九歳にかけての二年間である。

山口時代の西田幾多郎はいかに生き、いかに思索していたのだろうか。西田研究の中で従来あまり着目されることのなかったこの点に本稿では焦点をあてる⁽¹⁾。まず、西田の職場であった「山口高等学校」の当時の状況について述べ、また、彼が山口のどこに住んでいたのかについての情報を整理する（第二章）。そのあと、西田のこの時期の日記・書簡・著作に順次目を向けていく（第二・三・四章）。日記は、自分自身のことを自分自身に語るモノログであり、書簡は、特定の親しい他者に宛てて自分の思いを表白するものであり、著作は、不特定多数の世間一般に向かって自己の思想を披瀝するものである。この三つの層に目を向けることによって、山口時代の西田の生き様、人柄、思想について立体的な像が得られるのではないかと思う。

一 職場と住居

当時の「山口高等学校」とはどのような学校だったのだろうか。

毛利元徳（一八三九～一八九六年、幕末の長州藩主毛利敬親^{（2）}の養子で、明治二年に家督を相続した）を会長とする私立「防長教育会」が設備・運営費を負担する形の

「山口高等中学校」が、その運営形態を維持したまま、明治二十七（一八九四）年に「山口高等学校」と改称されていた。その後、防長教育会の財政難もあって明治三十八（一九〇五）年に、官立の「山口高等商業学校」に転換されることになる。『山口高等商業学校沿革史』⁽²⁾によれば、西田幾多郎は明治三十年九月十一日「講師嘱託」に任じられ（担当学科は「英語、独逸語」）、明治三十二年三月十八日に「教授」に昇進し、明治三十二年七月二十一日に第四高等学校教授に転任、と記録されている（三四九、三五一頁）。この『山口高等商業学校沿革史』にはさらに各年度の「教官学科担当」が掲載されていて、明治三十年度の教官二十一名の中に「英語、独逸語 西田講師」とあり、明治三十一年度の教官二十名の中に「英語、独逸語、論理⁽³⁾ 西田講師」と書かれている（三七四、三七五頁）。ちなみに、ほかにどんな科目の担当者がいたかというと、明治三十年度には、英語・ドイツ語のほかに、倫理・漢文・国語・歴史・法学通論・経済通論・政治地理・数学・化学・物理・測量・図画・動植物・地質及鉱物・体操、の担当の教官がいた。同書に記載されている明治三十一年七月の大学予科卒業生四十七名の中には河上肇の名もある（四二二頁）。のちにマルクス主義経済学者になる河上肇（一八七九～一九四六年）である。西田は山口で河上にドイツ語を教えた。

なぜ西田は山口にきたのか。西田は金沢の第四高等学校の生徒だったとき、北条時敬（一八五八～一九二九年）という教師の家に寄寓していた。数学の先生で、坐禅の手ほどきも受けた。その北条先生が、明治二十九年より山口高等学校長を務めていて、その先生に呼ばれたものと考えられる。その頃の西田は、明治二十九年の四月から務めていた母校第四高等学校の講師を翌年五月末にいきなり罷免されて職を失い、家庭内では、同じ頃、二年前に結婚していた西田の妻が家出をしたことで西田の父が激昂し、その十五日後に西田夫妻は離縁に至る（明治三十一年の父の死の翌年、二人は復縁することになる）というごたごたがあった。心機一転の機会を北条先生が西田に与えたのであろう。ではなぜ二年で山口を去って金沢の

四高に移ったのか。これも明治三十一年より四高の校長に転任していた北条先生の計らいだった。

明治二十八年三月に作成された『精細山口縣中地圖』⁽⁴⁾所収の「山口市街」の地図(28頁に掲載)を見ると、「山口高等学校」は現在の県立美術館の位置にある。この地図には、たとえば、山口市内を現在横切って走っている二本の大きな幹線道路(県道二〇四号と国道九号)はまだない。旧国道九号(現在の県道二〇四号)は、昭和三十八年十月の山口国体を機に開通した。その北を並行して走っている現国道九号(山口バイパス)が完成したのは平成七年二月のことである。鉄道(山口線)も、したがって「山口駅」も地図には一切記載されていない。現在の「山口駅」が開業したのは大正二(一九一三)年のことである。

ところで、西田が山口に滞在していたときに住んでいた場所は、三箇所ほど知られている。

まず、「米屋町十五番地」(阿部太兵衛方)。この住所は日記(西田全集十七巻二四頁)にも、書簡(西田全集十九巻四八、四九頁)にも確認できる。

日記によれば、明治三十年九月七日、山口に到着した西田は「akabayaを訪れる。これは「坂田屋」という宿屋を誤記したのではないとも言われている。そして同年十月十九日、「松本氏の脇の家に移る」。ここに「米屋町十五番地」という住所が書かれている。同年十一月十八日付けの伯父(母寅^{とぎ}の兄)、林美宛^{りんみ宛}ての書簡では、「山口県山口町大字米屋町十五番地」⁽⁵⁾阿部太兵衛方に寄留せる旨^との「寄留届」を、十一月十三日に(おそらく山口の役所に)提出した、と書かれている。

昭和四十二年度の山口市の『住居表示旧新対照表』⁽⁶⁾によると、そのときまで「米屋町十五番地」だったのは現在「太陽堂旅館」の立っている所(米屋町二一三)であり、江戸時代以来の野上屋という老舗の履物屋が今から十年ぐらい前まで営業していた所の左隣である(写真1)⁽⁷⁾。日本全国の地方都市の例にもれず、山口の商店街も、今や郊外の大規模スーパーに客をとられていくのだろうか、昔ながらの店が消えていき、空き店舗が見られるようになった(西田の郷里、石川県の宇野気もまた同様に、数年前に大型スーパーができて、町の様子が変わりつつある)。とはいえ、今でもここは山口の商店街のいちばん賑やかなあたりである。もし明治三十年から昭和四十二年までに番地の変更がなかったとするならば、西田が住んでいたのはここだということになる。このあたりの家の多くは、商店街に面しているのが五メートル余りだとしても、長細く奥が深い。この奥のほうに西田が

住んでいたのかもしれない。

上田久はその著『祖父 西田幾多郎』⁽⁸⁾の中で、本文では西田が「山口では米屋町十五番地の坂田屋の離れに宿を取った。」(九八頁)と書き、註では「阿部家は……現在米屋町二十八番地「正確に言う」と、昭和四十二年の番地変更により、「米屋町三二五」……引用者」山口銀行の所に洋品店を開いていた。……恐らく阿部家、現在米屋町二十八番地山口銀行敷地の裏の離れに落着いたのであろう。」(二一〇頁)と書いている。つまり、上田説を整理すると、西田はまず「米屋町十五番地の坂田屋の離れ」に宿を取り、その後、「阿部家、現在……山口銀行敷地の裏の離れ」に移った、ということになる。しかし、西田の書いているところによれば、当初泊った、西田のいう「akabaya」が「米屋町十五番地」ということではなく、十月に引越した先が「米屋町十五番地」なのである。「明治三十五年頃の西田の住所録に米屋町十五番地阿部太兵衛とある。」という上田久の記述(一一〇頁)を考慮すると、「十五番地」に「阿部家」が土地をもっていたと考えるべきだろう。残る疑問は、西田の時代の「米屋町十五番地」が、(いつからかは今のところわからないが)昭和四十二年まで使われていた住居表示通り、現在の「太陽堂旅館」の場所だったのか、あるいは上田のいう「現在……山口銀行敷地の裏」だったのかどうか、ということである。山口市史編さん室の古賀信幸氏にお伺いしたところ、「明治期の地籍図をもとにしたとみられる『山口町地引絵図』(山口市管財課蔵)という資料」で確認していただいた。これによると、その頃と昭和四十二年頃とで番地の変更はないようである。番地変更がないとすれば、西田のいた「米屋町十五番地」は現在の太陽堂旅館の場所ということだろう⁽⁹⁾。

このほかに二箇所、西田滞在地を上田久『祖父 西田幾多郎』が伝えている。ひとつは「相良小路」の上田方。米屋町の住所から米屋町の通りを百メートル進んで右に折れた通りが相良小路である。商店街から静かな住宅地に入り込む。掲載した『精細山口縣中地圖』(28頁)の「カ」と「ヨ」との間の通りが「相良小路」である。「上田」家の場所は不明である。

もうひとつが「下堅小路四十五番地」の岡部方(写真2)。「山口高等学校」までの通勤距離はあまり変わらないかもしれないが、下堅小路は商店街からはだいぶ離れたところにある。岡部家の正面は、いわゆる「萩往還」に面している。日本海側の萩から瀬戸内海側の三田尻港(防府市)に至る重要な交通路であり、藩

主毛利氏の参勤交代の際にも使われた。岡部家の裏手には龍福寺がある。大内氏の館の跡地である。この寺の周囲は近年多くの家が立ち退いて大規模な発掘調査が行われた。

岡部家は、かつては佐々並 現在、萩市に属する山間部の庄屋で、山口の中心部に出てきて豎小路に居を構え、佐々並の米を販売していたそうだ。豎小路に面しているのは七メートル余りだが、奥行きが深く、いちばん奥の離れの家に西田が住んでいたらしい。

上田久『祖父 西田幾多郎』には次のように書かれている。

「岡部家の裏にある離れは二階建てで、学校にも近く、上二間、下二間で台所もついているが、幾多郎はここで一人読書していたらしい。ただしその頃のままの建物は入口の冠門（かぶきもん）「冠木門（かぶきもん）のことだろう……引用者」たださうである。」
(一一〇頁)

おそらく、西田が山口で住んだ三箇所のうち、住居が残っているのは岡部家だけだと思われる。二〇一三年一月四日、岡部昌平氏にこの建物を見せていたかどうかとともに、お話を伺った。たしかに建物には後の改修工事が施されているが、基本的なつくりは変わらないらしい。二階建ての離れの家で、下の階に二部屋あり、上の階にも二部屋と廊下があり、二階の部屋の窓からは目の前に龍福寺が見える。

明治三十一（一八九八）年九月十四日の日記に「[Ubersiedlung]「転居」という記述がある（西田全集十七卷三七頁）が、これが相良小路への転居のことなのか、下豎小路への転居のことなのかは不明である。

二 日記

明治三十（一八九七）年以降の西田の日記が残っている（西田全集十七卷二三～五〇頁）。最初の年の日記は九割ぐらいがドイツ語で書かれている。日記によれば、西田は明治三十年の九月七日（火）の正午に山口に到着し、明治三十二年の七月八日（土）に山口を去った。

山口滞在中の西田は、山口のあちこちを歩きまわっていたようである。次のような寺や山や滝に足を運んでいる。ローカルな地名が多いので、「」内に簡単な解説を入れておく¹⁰⁰。

「湯田へ散策」（一八九七年十月三日）

「雪舟寺に遊ぶ」（同年十一月三日）「雪舟の庭」（写真3）のある宮野の常栄寺のことと思われる」

「方便山ニ行ク」（同年十二月五日）「鳳ほう山へんざん」（写真4）のことだと思われる¹⁰¹」

「姫山ノ後辺ヲ散歩ス」（同年十二月九日）「姫山は、山口駅と現在の山口大学との中間にある小さい山。標高一九九メートル」

「方便山ノ下ニユキ梅ヲ探ル」（一八九八年二月二十六日）「鳳山」のことだと思われる。東鳳山（とうほうざん）の麓に「二ツ堂」という梅の名所があった」

「雪舟寺ニ遊フ」（一八九九年一月二十九日）

「吉敷ノ滝ヲ見ル」（同年一月三十日）「龍藏寺境内の「鼓つづみの滝」（写真5）のことと思われる」

「午後、級の生徒らと鳴滝（なるたき）へ散策」（同年二月三日）「鳴滝は山口から防府に向かう途中の左手、泰雲寺の近くにある（写真6）」

「一ノ坂へ赴き、滝を見る」（同年二月十九日）「錦鶏の滝（写真7）のことと思われる」

「吉敷赤妻（あかつま）ニ行キ古墳ヲ見ル」（同年二月二十六日）「五世紀前半頃の古墳。現在は埋められ、空き地になり、説明板が立つのみである（写真8）」

「仁王ノ滝ヲ見ル」（同年三月五日）「仁保」の誤記で、「犬鳴の滝」（写真9）のことと思われる。現在、駅名などは「にほ」だが、旧来「にお」と呼ばれていた」

「香山園ニ遊フ」（同年五月七日）「瑠璃光寺の五重塔（写真10）の周辺一帯のエリア」

「雪舟寺ニ遊フ」（同年五月十四日）「雪舟寺」は合計三回登場。気に入っていたのかもしれない」

「夜螢ヲ見ル」（同年六月三日）「一の坂川（写真11）の螢だろう」

「螢花（火）ヲ見ル」（同年六月五日）

このほかにも「散歩」とか「山ニ登ル」という記述が見られる。西田はかなりいろいろなところを歩きまわっている。昔の人は概してそうだったということかもしれないが、西田は健脚である。

宴会や会合で次のようなところも訪れている。

「露山堂ニテ学校ノ月次会アリ」（一八九七年十二月四日）「毛利敬親が藩庁を山口に移した際に藩庁内に建てられた茶室で、明治二十四年に香山公園内に移築されて今日に至る」

「夜湯田ニテ「北条」先生ノ送別会アリ」（一八九八年二月二十四日）

「午前七時半ヨリ学校職員一同ト馬車ニテ三田尻ニ行ク 毛利（元昭）公邸ニテ饗応ヲウク」（一八九九年一月二十二日）「防府の毛利邸。第一章で既述のように、

山口高等学校は毛利家からの財政的支援を受けていた」

「葉香亭二会アリ」(同年二月二十五日)「明治十年頃から平成八年まで続いた料亭で、平成十六年に天花に移築復元された」

「湯田瓦屋ニテ月次会アリタリ」(同年五月二十一日)「瓦屋は湯田温泉の松田屋ホテルの裏にあった旅館」

「夕頃ヨリ湯田二月次会アリ余ノ送別会ヲ兼ヌ」(同年六月三十日)

学校の行事で、次のようなところにも行っている。

「此日ヨリ行軍 大田ニ至ルマテ坂路頗ル險悪ナリ 山ニテ演習大ニ疲ル 夜九時大田ニテ宿ス」(一八九七年十月二十七日)「大田」は、現在美祿市に属する」

「此日ヨリ行軍 篠目ノ方ニユキニ王村辺ニ宿ス」(一八九八年三月四日)「JR山口線の仁保駅と長門峡駅の間に篠目駅がある。二王」は「仁保」の誤記と思われる」

「生徒三田尻マテ競走ス」(紀元節の)式終リテ後 余輩八人三田尻天神ノ杜ニ行キ午後六時頃帰宅 大ニ疲労ス」(一八九九年二月十一日)「三田尻天神」は今の防府天満宮

生徒が紀元節の日に三田尻までマラソンするというのは、十六キロぐらいあるので、かなり過酷な競走であつたろう。教師として「行軍」に参加している西田ではあるが、彼自身の金沢の学生時代は学校当局に反抗し「行軍あれば則去り」(西田全集十一巻三五八頁)、その結果落第し、中途退学している。

明治の元勲が山口を訪れ、学校に来たという話も時々書かれている。当時の山口の土地柄を思わせる。

「山県(有朋)元帥来校演説アリ」(一八九八年三月二十二日)

「桂(太郎)大将来校」(一八九九年四月一日)

「伊藤(博文)侯山口ニ来ル」(同年五月三十日)「正しくは「侯」だろう」

「中学校倫理講堂ニテ伊藤侯ノ演説アリタリ」(同年五月三十一日)「当時の「山口中学校」は現在の山口県立山口高等学校の前身」

「西郷(従道)侯学校ニ来ラル」(同年六月十四日)「正しくは「侯」だろう」

さて、この時期の西田は、坐禪の修行にひとときわ熱心だった。

西田は毎年の日記の表紙の裏に自分の生活において日々心がけたいと思う指針あるいは決意表明のような言葉を書き込んでいる。たとえば、明治三十一年の日記の表紙の裏には次のような警句が書かれている(西田全集十七巻三八頁)。

「光陰一過再来せず 須く念々刻々大憤志を起し妄念を去り大道に徹せんこと

を務むべし」

「志を大にして小利小成を願ふへからず」

「一寸の光陰も重んずべし」

「安逸ハ恐れヘキ讐敵ナリ 人ハ時々刻々白刃頭上ニカカル心持ニテ居ルヘシ」

禪の修行、そして自分の生活を律することへと意識を集中しようという決意がみなぎっている。「安逸」にふけることを警戒し、時間(「光陰」)を無駄についやさず、つねに緊張感をもって「志」を維持しようと西田は自分に言い聞かせている。

竹内良知は山口時代の西田の精神的転換を次のように論じている。

「西田が禪に志したとき、禪はT・H・グリーンから学んだ『自己実現』のための『最捷徑』『捷徑』とは近道のこと……引用者」であつた。それは、いわば、すぐれた学者になるということをもふくめての『自己実現』のための手段であつた。そのかぎり、西田は禪に志しながら、まだかならずしも宗教的ではなかつたのであつた。しかし、いまや宗教的関心が、学者として傑出した人物になろうとか、すぐれた学問的業績をあげようとかいう関心よりも優越したものになった。非凡な人物になるという立身出世の野心よりも、『真正の己を得』るという魂の問題にたいする関心のほうが強くなった。少なくとも、現実生活の超越という宗教的な内面性にたいする関心が優越なものとなりはじめたのである。いつてみれば、西田は山口在任中の明治三〇年の秋ころから、はじめて宗教的になったのである。」¹³⁾

自宅で「打坐」という日も多いが、毎年正月は京都の寺で「接心」(数日間にとる坐禪の修行)に参加していた。

「午前五時二十分京都出発 午後九時十分徳山着」

というのはその京都の接心から山口に帰る途中の日記である(一八九八年一月八日)。現在では新幹線で「午前」九時より前に着いているだろうが、当時は「午後」の九時にやっと徳山に着いた。翌日「船ニテ三田尻着」、「馬車」で山口まで帰ったらしい。

坐禪の修行に熱心できまじめに生きようと思っていた西田は、自分がついつい怠けて楽しいことにふけていくことに、そのつど反省し自戒していたようである。彼の自戒の言葉が日記にしばしば登場する。とくに目をひくのが、時間を無駄にするという自戒とともに、もう菓子を食べないという反省である。

「菓子を食べすぎたり 菓子は之より断然癪すべし」(一八九七年十一月二日)「正

しくは「廃す」だと思われる」

「菓子ヲ禁ズ」(一八九八年九月二十一日)

二十七歳から二十九歳にかけての青年西田が、禁欲的に生きようと志して、そうもいかず、そのつど反省している様はなにか微笑ましい。

菓子を食べてそのつど自戒するこの禁欲的な青年西田が面白がってのめりこんで、決してそれを自戒しなかったことがある。

「戸川君来訪 パンヲ食フ タニFootballヲ遊ブ」(一八九九年五月二十四日)

「タニ戸川君ヲ訪ヒ共ニ『フットボール』ニ趣ク」(同年六月二日)

「午後吉田君ヲ訪ヒ共ニ『フットボール』ニ出ツ」(同年六月九日)

「タニ戸川君ヲ訪ヒ共ニ『フットボール』ニユク」(同年六月十三日)

「夜フットボールニ行ク 人少シ」(同年六月十八日)

「Football」というのはサッカーのことと考えてよいだろう(厳密にいうと、今のサッカーとはルールが違っていたようである)。最初は「戸川君」に誘われたのかもしれないが、それ以後毎週のようにサッカーに興じている。その次の月には山口を去っていく西田にとって、それは山口の楽しい思い出になったのかもしれない。西田と一緒にサッカーをした「戸川君」は、英文学者の戸川秋骨(一八七〇―一九三九年)で、島崎藤村らとともに『文学界』の同人だった。彼は当時の西田を回想して、自宅に来て、一緒に丘を散歩してもまったく口をきかない、つまり、友人に会いたがるのだが、会ってもしゃべらないというタイプの人間であったことや、口数の少ない西田に同僚のイギリス人が「Are you happy?」と質問したことから、西田のあだなが「アア・ユウ・ハッピー」だったというエピソードを伝えている⁽¹⁴⁾。

「西田君は口数をきかない人であった、そして何か宇宙の秘密でも見つけるかのような、むしろこれも睡むたそうな神秘的な眼をもっていた。一向に周囲と不関焉と云ったような、顔をしていた。同僚のイギリス人が、嘗て、君はそれで面白いのかい Are you happy と訊いた事があつたぐらいである。私共はそれ以来西田君をアア・ユウ・ハッピーと綽名したのであつた」(三三〇三頁)

「西田君は、外から『戸川君居るか』と叫ぶのである。……相對して茶でも啜るのであるが、西田君は黙々として一口も口をきかない。……一緒に出て、近くの小高い丘「亀山」のことかもしれない……引用者」にのぼる。……例に

よって口は一向に利かない。……さつさと丘を下りかける。私も一緒に下りる、しかも一言も互に言葉を交わすでもない。そして適当な処へ来て、西田君は『失敬』と云って帰ってしまった。私は些か狐につままれたような具合であつたが、それでいて、少しも悪い心持はしなかった。否、むしろそれが非常にうれしかった。何とはなく、無言で相對していたのが、却って快かつた。以心伝心とでもいうのであろうか。」(三三〇三―三三〇四頁)

ところで、戸川秋骨のほかに、山口高等学校で西田の同僚だった人物の中に登張竹風(一八七三―一九五五年)がいる。気の合う友人だったのだろう。日記にしばしば名前が登場する(一八九七年十月三日、十一月九日、一八九八年一月二十六日、三月四日、三月十日、三月十九日、九月二十日、一八九九年二月二十日、二月二十七日、六月七日、計十回)。

この登張との交遊は西田にニーチェを読む機会を与えたのではないかと推測される。

「Nietsche到着 面白クヨミタリ」(一八九九年二月二十五日)

「午前二ニーチェを読了ス」(同年二月二十六日)

本が「到着」して次の日には「読了」している。このとき西田が読んだのがニーチェのどの著作なのかは残念ながら残念ながらわからない。

ニーチェへの西田の関心と、西田と登張との交遊に関係があると推測できるのは、登張が「日本にニーチェを最も早く紹介した」人物だからである。手塚富雄は次のように書いている。

「日本にニーチェを最も早く紹介したのは、竹風・登張信一郎だと言われている。明治三十三年(一九〇〇年、ニーチェの没年)の雑誌『帝国文学』における『独逸の晩近文学を論ず』がそれで、明治三十五(一九〇二)年にはその著『ニーチェと二詩人』が出た。」⁽¹⁵⁾

三 書簡

(1) 山本良吉宛て書簡

この時期に西田の書いた書簡がいくつか残っている(西田全集十九卷四七―五〇頁)。

その一つが明治三十(一八九七)年十一月十一日付けで友人の山本良吉⁽¹⁶⁾

(二八七一―一九四二年)に宛てた書簡である。山口に来て二ヶ月が経っている。山本は当時病氣だったようで、それを気づかい、激励する趣旨の手紙である。ただ、一般的な見舞い状なら体を大事にしてくださいと言うところだが、西田の手紙はちよつと変わっていて、肉体としての自己をいたずらに保全しようとするよりも、精神上の自己を尊重するほうが重要だと述べている。

「この肉身も大切なるへけれども人は無理にこの肉体を保たざるへからざるの理ありや 思ふに人の生命は肉身にあらず其人の理想にあるならん 人か其内心に深く探りて善と思ふ事に反する事をなすの時は 即ち己か他に圧せられ己たる者は已に死亡したる也……人か深く深く心の奥を探りて真正の己を得て之と一となるの時あらは たとひ其時間一分時なり(と)も其生命は永久ならん……君は何の故に之の肉体の生存を欲し玉ふ「給ふ」や 一毫も精神上の己に背いて之の肉の永存を計らは たとひ肉体は存するも精神は死去し終らんか」⁽⁷⁾

病氣の友人に向かつて「何の故に之の肉体の生存を欲し玉ふや」と問いかけるのは確かに普通ではないかもしれないが、むしろそういう励まし方のほうが適切な間柄だったのだろう。山本良吉は四高の学生時代以来の親友の一人である。この一節の前に、次のように書かれている。

「人間の欲は誠に鉄面「鉄面皮」なる者にて 一たひ之を充せは又其上を望む其頭をあけ来るや誠にハイドラ「ヒドラ」九つの頭を持つ海蛇(ギリシア神話)……引用者」の頭の如し 如かず其根本より断滅するの愉快なるには。人間はそれよりそれと心につかれは繁忙又繁忙寸刻も安き能はず 君深く其心の奥に返りて忘念「正しくは「妄念」」の本を斬らすんは到る処に不満は君を苦むるならん」

人間の「欲」はかぎりなくなにかをむさぼり求める。たえずあくせくととにかくに駆り立てられ安心の境地には至れない。この「欲」の「根本」・妄念・執着の「本」を「断滅する」にこしたことはない。そうすれば「不満」は解消し、安心の境地に到達できる⁽⁸⁾。

そして、手紙は次のように続く。

「余も始めて当地に参り候時は誠にいつれを見ても不快なりしか其後独りにてよくよく考ひ「正しくは「考へ」」 今では何となく心安かに相成り申候 いろいろ不満に思ひし事も願は己か心のいやしきを恥かしく存し候 馬太伝の六章に Which of you by taking thought can add one cubit unto his stature?

〔汝らのうち誰か思ひ煩ひて身の丈一尺を加へ得んや〕の語を深く感じ候か 之の語を守れば別に不平の起る筈も有之間敷と存し候」

二ヶ月前に山口に来た頃の西田は、何を見ても「不快」「不満」だった。しかし、不快や不満は自分の心中の欲望あるがゆえだと悟ったのちは「何となく心安か」になってきた。この境地に至らしめたものとして、新約聖書の「マタイによる福音書」の思想が挙げられている。いわゆる「山上の説教」の中の、人間があれこれ思い煩う必要はないのだと説かれる部分である⁽⁹⁾。そして、この手紙の最後のほうで再び、

「近頃マタイ伝第六章の神は時かす収めす蓄へざる鳥も之を養ふとききて少しく心を安んしうるなり」

と、その感慨を繰り返し、

「バイブルは実に吾人か心を慰むるものなり 余はどうして論語の上にありと思ふか貴説いかか」

と山本良吉に問いかけている。『聖書』は人の心を慰めてくれるものである。その点では『論語』よりも上にある、と西田は感じているのである。

ところで、禅に打ち込みながらキリスト教の福音書を読んで感銘を受ける、ということは西田の中でなんらの矛盾もなかった。『仏教かキリスト教か』といった二者択一ではなく、仏教でもキリスト教でも、自分の心に響くものは受け入れる。仏教の核心と西田が考えるもの、そしてキリスト教の核心と西田が考えるもの、両者が重なり合うところを西田は本来の「宗教」という形で語ろうとする。

(2) 山口とキリスト教

西田が聖書を読んで感銘を受けたことを、山口という土地柄と関連づけて論じる伝記は少ない⁽¹⁰⁾。山口の町は十六世紀にザビエルが日本にやってきて最も長く滞在し、布教したという歴史をもっているからである。

スペインとフランスとの間のナバール王国に生まれたフランシスコ・ザビエル(一五〇六―一五五二年)は宣教師としてまずインドを訪れ、さらに一五四九年には日本の鹿児島に上陸した。日本で彼の願いは、天皇に謁見して日本の宣教の許可を得ることと、比叡山を訪れて学僧たちと討論することであった。山口で領主大内義隆(一五〇七―一五五一年)に謁見したのち、京都を訪れるが、応仁の乱以来の戦乱により荒廃したこの都では、いずれの目的も果たせなかった。そこでザビエルは、京都ではなく山口に帰って宣教することに決める。

守護大名の大内氏は明（中国）との貿易を中心として経済的な基盤を築き、京都を模した町を山口につくり、文化を保護奨励していた。今に残る五重塔（写真10）の建立は一四四二年といわれ、大内文化の粋を示している。戦乱を逃れて多くの文化人が大内氏のもとにやってきた。大内氏の庇護のもと中国で約二年間水墨画を学んで帰国した雪舟（一四二〇～一五〇二または一五〇六年）もまたその一人である。

ザビエルの眼にも、荒れ果てた京都よりも山口のほうが魅力的だったのである。大内義隆はザビエルに無人の寺（大道寺）を住居として与え、宣教を許可した。ザビエルは一五五一年の四月下旬から九月までの四ヶ月半の間山口に滞在し、その間毎日街頭でキリスト教の教えを説いた。この間に約五百人がキリシタンになったと言われる。

とはいえ、やがて日本ではキリスト教が禁じられ、それから三百年ぐらいが経過している。山口県の萩や島根県の津和野は、明治初年に日本のキリシタンが弾圧され、強制連行されてきて虐待された土地でもあった。決して山口がキリスト教の雰囲気根強く残ってきた町というわけではない。町の中心にある亀山にザビエル記念聖堂が建てられるのも戦後のことである。

ただ、一八六八年十月に来日したヴィリオン（一八四三～一九三二年）という熱心な神父が、一八八九年から一八九五年まで山口で布教に当たっていて、一八九三年に「大道寺」跡を発見するという出来事があった。これを機に山口の町で、ザビエルやキリスト教というものが改めて注目されていたのかもしれない。西田が山口を訪れる数年前のことである。

フランスのヴィリオン（Amatus Villon）は明治元年の来日以来、六十四年の長きにわたって日本で宣教をつとめ、昭和七年に日本で没した。狩谷平司『ビリオン神父の生涯』²⁴によると、ヴィリオンは山口に来てすぐに拠点となる町の中心の「米屋町」に移し、そこで六年間、毎週講演をおこなった（二三五～二三六頁）。

「明治二十二年は、米屋町の祈りの家への引越準備で暮れた。町の中央への進出は、日曜日の講演会も便利にしたし、万事都合よくなって、その効果は目に見えて現れた。講演会が済むと、座談会のような形で、弁士と聴衆との間に膝つき合せた研究が行われるのが通常であった。一つの質問が出ると、伝道士が之に答え、その質疑応答は、更に派生的な問題を生んで、実に熱心な研究であった。ビリオン神父は、此処に、フランシスコ・ザベリヨ聖師が三百

年前に看破した、『日本人は好奇心、探究心に富み、餓えたる者の如く物事を研究^{きわ}める』国民を見た。」（二五三頁）

大内義隆がザビエルに譲渡したという大道寺は山口のどこにあったのか。ヴィリオンはそれを探した。山口県知事の原安太郎もそれに協力したという（二三九～一四五頁）。明治二十六年、ザビエルの時代の山口の地図が発見され、大道寺跡の地（金古曾）が判明する（一九〇～一九三頁）。のちにヴィリオンは諸方面からの寄付によりこの地を買い取り、大正十五年、この地でザビエルの記念碑（写真12）の除幕式が盛大におこなわれた。このとき「奈良天主堂教会主任司祭」となっていたヴィリオン神父も列席する（二九一～二九八頁）。

三百年前に山口にザビエルが来てキリスト教を布教した、という話は山口の人々に長らく忘却されていたのだが、ヴィリオンが米屋町で講演をしていた頃、改めて山口の人々の意識にのぼるようになった。

「人々は、初めて自分達の生地^{きぢ}の、奇しき歴史を聴いて、今更のよう^{いまだ}に感じ、且つ驚いた。殊に当時山口は、日本のオクスフォードとも呼ばれるべき学術の都だったので、各学校の教授団の間にも、頻りにこの問題が取り上げられるようになり、山口には茲^{こゝ}暫く、日本西教『西教』とはキリスト教のこと……引用者」史研究熱が、燎原の火のように燃え広がった。」（二四五頁）

と狩谷平司は書いている。「日本のオクスフォード」というのは大袈裟にも聞こえるが、西田を含め当時の山口の教師の錚々たる顔ぶれを考えると、あながち誇張でもないかもしれない。

(3) 西田にとっての山口

さて、友人に、不平不満は自分の心のいやしさによると書き、それを悟って心安らくなったと書いた西田ではあるが、やはり山口は「山の中」で「つまらぬ」とも書いている。郷里の伯父に宛てて明治三十年十一月十八日に書かれた手紙の最後には、

「山口と申す所は誠に小さく処にて丁度国の大聖寺^{だいしょうじ}程に候 山の中にて随分つまらぬ所に御座候」
としたためている。

そもそも、西田は広大無辺な「海」を眺めているのが好きだったらしい²⁵。七尾の中学校の教師をしていた頃は、毎日浜に出てじっと海を見ていた。のちに鎌倉に住んだとき、「私は海を愛する、何か無限なものが動いて居る様に思ふので

ある。」(西田全集七卷三五〇頁)と書いている。七尾から日本海を眺め、鎌倉から太平洋を眺めていた。山口も、もちろん南のほうに行けば瀬戸内海に面しているのだが、やはり三百六十度、山に囲まれたこの小さな町は、「海」好きの西田には圧迫感を感じさせたのかもしれない。

そればかりではなく、「長州」との違和感もあったかもしれない。西田が十六歳のとき学んでいた金沢の「石川県専門学校」は「全体が一族といふ様な温味のある学校」、「師弟の間に親しみのあつた暖な学校」であつたが、この学校が学制改革で官立の「第四高等学校」に改まると、中央政府による管理が強まり、薩摩人の校長のもと「規則づくめな武断的な学校」へと「校風が一変した」(西田全集十卷四一三―四一五頁)。不満をもった山本良吉がまず退学し、西田もそれに続いた。旧来の加賀前田藩以来のなごやかな学校の雰囲気は薩長藩閥の中央政府が無理やりぶちこわしたことに抵抗していた西田にとって、やはり「薩長」の片方である長州の中心地は居心地がわるかつたのかもしれない。

さらに言えば、西田は単身赴任であつた。明治二十八年に結婚した妻、翌年に生まれた長女、その二年後に生まれた長男、みんな遠く離れた地にいる。父との確執、その父の意向による西田夫妻の一時離縁、父の死、西田夫妻の復縁へ、と家庭内は落ち着かなかつた。山口から金沢に帰つた西田は、妻子と母と一緒に「私の心身共に壮な、人生の最もよき時」(西田全集七卷三四八頁)を迎えることになる。たしかに、山口は、仕事を失い家庭問題でも困惑する失意の西田に旧師が急場であてがってくれた逃れ先であり、北陸、京都、鎌倉という西田が長く住んだ場所と比べると、山口というところは、かなり異他的(trend)な、よそよそしい空間であつたろう。

とはいえ、山口滞在から約四十年の歳月が流れたとき、西田にとって、山口は不安や不満の中でもそれなりに楽しくも過ごした青春の地だったのであり、「懐旧の念」を抱かずにはおれない町であつた。ボン大学でカール・バルトに学んできた滝沢克己(一九〇九―一九八四年)が帰国し、山口高商への就職が決まつた昭和十二(一九三七)年、西田は滝沢に手紙を書いている。

「承りますれば山口に定まりました由 周囲に刺激のないのは遺憾に思ひます
が又 静に読書静思大に自ら養ふには適するならんと存じます 山口は四十年
前旧知之地 今いかになり居るか懐旧の念に堪へず」(西田全集二十二卷
一六頁)

四 論文

西田が山口に滞在していた時期に発表された短い論文がある。「山本安之助君の『宗教と理性』と云ふ論文を読みて所感を述ぶ」と題する論文である(西田全集十一卷五二―五七頁)。タイトル通り、『無尽燈』という雑誌に掲載された山本安之助⁽²⁾の「宗教と理性」⁽³⁾という論文を読んだ西田が、それに反発するという意味で触発されて自分の考えを書き、同じく『無尽燈』の第三卷第六号に掲載された(一九八八年六月十五日)文章⁽⁴⁾である。西田が山本論文のどこにひつかつたのかを明らかにするために、まず、この山本安之助の「宗教と理性」という論文の内容を見てみよう。

(1) 山本安之助「宗教と理性」

宗教とは何かを山本は問う。いずれの宗教にも、なんらかの「信条」⁽⁵⁾があり、その信者の主観には「信条に対する信念」がある(上、一頁)。この「信条」と「信念」とが宗教を他の社会現象と区別するものだ、と山本は言う。

「宗教の宗教たる所以は、信念の存在に外ならざるなり。」(上、二頁)

このような宗教は、理性を唯一の権威とする「哲学科学」とどのような関係にあるのだろうか。

我々には、「無限を憧憬し、無限と有限との関係を明晰にし、安立の基礎を得んとするの念」としての「宗教心」がある(中、一一頁)。この「宗教心」には「知情意」の三要素が含まれているが、「宗教心の中につき其主位を占むる者は感情の元素なり」(中、一一―一二頁)、つまり宗教心の中心は「感情」だ、と山本は言う。一方では信念を理性に適合させようという試みがあるものの、

「安立を求むるの感情は、甚だ強盛なるを以て、理性の活動は減少し、往々盲目的に信条を採択するに至るの傾向あり」(中、一二頁)、

つまり、安心を求める感情が宗教において理性が働くことを阻害し、人々は盲目的・非合理的に信条をうけいれることになる。宗教は信条に理性が介入することを許さない。

「信念は保守的なり、理性は進取的なり」(中、一六頁)。
信念と理性とは「衝突」せざるをえない。

「人格的神の思想」(キリスト教)も山本によれば「迷妄」である(下、四頁)。

「世の徒に經典を崇拜し、信条を默示視するの徒、少しく其蒙を啓くべき也。」
(下、六頁)

やみくもに經典を崇拜したり、信条を神から与えられた啓示と見做している人々は「蒙を啓くべき」である。まさに「啓蒙」思想である。

パスカル、ヤコービなどのように、理性は所詮、認識の「一部分」にしか関わらず、「全体の認識」に関わるのは「感情」であり「直覚」である、と考える思想もたしかにあった。しかし山本は、そもそも人間に「無限を直覚するの感情」はないのだと主張する(下、六・七頁)。

「予輩は無限と有限との関係を断定し、相対と絶対との交渉を解釈する者は、実に理性の一職能にして、理性以外の能力が此職能を尽すこと能はざることを主張せんと欲す。」(下、七頁)

つまり、無限と有限との関係、絶対と相対との関係を解釈するものは「理性」以外にはないのだと山本は言う。

山本は「宗教」そのものを否定しているわけではなく、

「理想の宗教は、吾人の理性に由りて、宗教的感情を導く者ならざるべからず」
(下、一一頁)

と主張する。つまり、「感情」に束縛されずに「理性」を働かせるような宗教を理想としている。それが具体的にどのようなものなのかはイメージできないのだが、方向性としては

「彼ユニテリアン^⑧の一派が、伝説的の權威に依らずして、合理的科学的の真理を以て、其基礎となさんと告白するが如きは、予輩の意を得たる者なり。」
(下、一一頁)

と述べている。

山本安之助の「宗教と理性」は、以上のような趣旨の論文である。「宗教」と「哲学科学」との対比を軸として、宗教上の信条が、安心を求める信者の感情ゆえに盲目的に信仰されている状態から脱却して、宗教の信条にも「理性」を介入させていくべきだ、という「啓蒙」的な見解が表明されている。

(2) 西田の山本批判

西田は言う。

「余を以て君の説を見るに、君は宗教の外形たる智識の方面を見て其本性たる感情的内面に重きを措かざりし嫌なきか。君の所謂宗教の定義は冷淡なる哲

学者の眼光よりしたる者にして真によく宗教家の胸懷を探りて之を得たる者なるかの疑なき能はず。思ふに宗教の宗教たる所以は其信条の如何其儀式の如何にあらずして、吾人が有限界を脱して無限の域に超人し、哲学に所謂絶対なる者と冥合する所以の極めて不定的な一作用にあるなり。」(西田全集十一卷五二頁)

西田にとって宗教の「本性」、すなわち本質は「感情的内面」であつた。どういふ感情的内面かというところ、有限界を脱して無限界に超越していく、すなわち絶対的なものと一体化するという心の働きである。仏教ではこれを「解脱」と呼び、キリスト教では「救われる」と呼んできた、と西田は言う。これは「直覚」であるから、「相対的理解力」によつては到達できない。

「宗教の本性とする所の者は毫も智識の助によりて生ずる者にあらず、全く智識以外の者たらざるべからず。宗教は宗教として別に独立の立脚地を有す」
(西田全集十一卷五三頁)。

その意味で「宗教の外形たる智識的方面」を宗教の本質と見做している山本の根本的立場を批判するのである。山本は「感情」という言葉を二つの場面で使っていた。自己の安心を求める一般信者の「感情」と、「全体の認識」としての「直覚」という意味の「感情」である。山本が宗教において働いていると見做す「感情」は前者の意味である。これに対して、西田は、後者の意味での「感情」が宗教において働いていると考える。

我々はどのようにして「絶対無限の境に入る」ことができるのか。それは「理解力」によつては不可能である。

「理解力によりて得たる智識は抽象的の者なり、實在の一部にして其全体にあらざるなり。智識は實在を解剖し説明し得るも、實在全体として活動する所以の者を捕捉する能はざるなり。然るに宗教の絶対無限に入るとは、真の絶対無限に入るなり、宇宙實在が全体として活動する所以のものを直に感得して實地に之を得るにあり。是理解力の能する能はざる所なり。」(西田全集十一卷五五頁)

「理解力」でなければ何によつて可能なのか。それは「智情意」のうちで言えば「感情」最も之に近しと云ふべきか」(西田全集十一卷五五頁)と西田は言う。そして、哲学者と詩人と宗教家という三者を比較して、

「哲学者は宇宙を見ること最も浅く又不完全なり、詩人の想像力は哲学者の智力よりも深く全体に入りたる者にして、宗教家の信仰に於て始て宇宙の全体

の深底に到達したる者なり。故に哲学者にして真に己れが目的を達せんと欲せば、畢竟宗教に入らざれば能はざるべし、……余は哲學的基礎の上に宗教を立てんとするを肯ぜざる者なり。」(西田全集十一卷五六頁)

と言う。「宇宙の全体の深底に到達」できるのは宗教家なのであり、哲学者も宗教に入らなければ目的を達成できない。哲學的基礎の上に宗教を構築するのは間違いだ、と西田は言う。

「信条は君も云はれし如く宗教上の一天才が無意識中に無限と有限との關係を感得して之を外形に顯はしたる者ならん。されども、宗教の本旨とする所は、この外に形したる信条の如何によらずして、之を感得したることの深淺にあらずや。信条ありて而して後信念あるにあらず、信念ありて而して後信条あるなり。」(西田全集十一卷五三頁)

かつて宗教上の天才が「感得」したことが概念化され、言葉となつて「信条」となつた⁽²⁴⁾。この「感得」の深さが宗教の本質である。西田は「信念」という言葉をこの「感得」と同義に使っている。ここが山本との決定的な違いである。山本にとって「信念」は、既存の「信条」を信者がうけいれる、盲目的に信仰するということではなかった。西田にとって「信条」はこの「感得」の「方便」(手がかり)にすぎない。それゆえ、

「信条の合理非合理は宗教を信する者の上に於てもさ程の大事にあらず」(西田全集十一卷五三頁)

ということになる。教祖の信条に束縛されているのは「宗教にあらずして迷信なり」と西田は言う(西田全集十一卷五四頁)。つまり、信条を盲目的に信じることを「迷信」だとして拒否する点で山本と西田は共通しているのだが、山本が信条こそ「宗教」だとして「宗教」全般を批判的に見ているのに対して、西田はそれは「宗教」ではなく、はなから「迷信」だとして批判しているのである。

西田は言う。

「余は耶穌教「キリスト教」……引用者」が中世に於て信条を議定して之に無限の威力を付する如き必要を感じし時は、早く已に生きたる耶穌教の亡びし時なりと思ふ。」(西田全集十一卷五四頁)

中世のキリスト教が「信条」を固定して權威たらしめたとき、生きたキリスト教、つまりキリスト教の生命は滅んだのだ。

ところで、前述の山本良吉とともに西田の金沢の学生時代以来の親友だった

のが鈴木大拙(一八七〇―一九六六年)である。西田が山口に滞在していた時期、実は鈴木大拙はアメリカに渡っていた。明治三十(一八九七)年三月、鈴木は渡米し、以後十一年間、シカゴ郊外のラ・サールに滞在し、ポール・ケークラスのもとで『老子道德經』などの英訳を手伝うこととなる。西田の日記には、鈴木に手紙を出したり鈴木から手紙を受け取ったりという記述が何度か見出せる⁽²⁵⁾。この時期に西田から鈴木に送った手紙は残っていないが、鈴木から西田が受け取った手紙はかなり残されている⁽²⁶⁾。

その中の一通で、西田の山本批判論文を読んだ鈴木が次のように賛意を表明している。

「『無尽燈』における君が所説大に意を獲たり、理智を以て宗教を律せんとする人世に尚多し、何となれば理智は表面にぶらぶらしてをる故一寸誰が眼にも付けねばなり、情意的活動の根本に至りては深く省慮したる後ならでは充分に呑みこめぬなるべし」⁽²⁷⁾。

この賛意はある意味では当然である。というのは、ともに禪の修行に熱意をもつ鈴木と西田とは、書簡で自説を開陳し合い、しばしば意気投合し、切磋琢磨し合ってきた仲であり、一方の著作は両者の共同作業の成果とも言えるからである。

(3)『善の研究』へ

山口を去って十二年後の明治四十四(一九二一)年、『善の研究』が出版される。最後に、この『善の研究』の宗教観と山口時代の論文「山本安之助君の『宗教と理性』と云ふ論文を読みて所感を述ぶ」に表明された宗教観とを比較してみよう。何が一貫し、何が変化しているだろうか。

有限世界を脱して無限なる力に合一することを宗教の中心に置く立場は、山口時代から『善の研究』まで一貫している。山口時代の思想から何が変わったかと言え、そういう「宗教的要求」が、本来あつた状態への回帰⁽²⁸⁾という形で語られるようになるということであろう。それは、「純粹經驗」が本来「主客未分」であるが、やがて「分化」し、再び「主客合一」に帰着するという考えが加わることによって論理的に説明される。

山口時代にすでに西田は、「有限」と「無限」、「相對」と「絶對」について次のように書いていた。

「余は有限を棄てて無限あり、相對を離れて絶對あり、此の宇宙を去りて外に超在する神あり、と考ふ能はざるなり、否、有限をすてたる無限は反て有限

なり、相対を離れたる絶対は反て相対なり、宇宙の外に超在する神は是全能の神にあらず、と思ふなり。真の無限は有限の中にあらざるべからず、真の絶対は相対の中にあらざるべからず。真に全能なる神は此の有為転変の宇宙の間にあらざるべからず。」(西田全集十一卷五四頁)

有限を離れた無限は真の無限ではなく、相対を離れた絶対は真の絶対ではない。「宇宙の外に超在する神は是全能の神にあらず」、「真に全能なる神は此の有為転変の宇宙の間にあらざるべからず」、つまり、真の神は、この世界の外に超越しているのではなく、この世界の出来事のただなかにいる。

超越神ではなく内在神だという西田のこの神観も、『善の研究』に継承されている(西田全集一卷一三九―一四〇、一四二、一五二頁)。とはいえ、山口時代の西田の宗教観は、神は内在的だというところにとどまり、自然と精神とを統一する「統一力」としての「神」を各自の意識の中に見究めるといような着想はまだなかった。

山口時代の論文で西田は、宗教の本質は、宇宙全体の根本をつかみとる「感得」にあり、これが言葉に表現され概念化されて「信条」(教理・教義)となるが、「信条」は「大事にあらず」と表明していた。『善の研究』の「純粹経験」について、「判断」以前の主客未分状態こそが内容豊富で、そこから「意味」や「判断」が現れた時点で内容は一面化され貧弱になっていると西田が考えていることと通じているように思われる。宗教上の「感得」の境地を日常生活全般にわたって適用したのが「純粹経験」という着想だったのではなからうか。

宇宙の真相を見抜ける能力をもつのは、哲学者より詩人、詩人より宗教家だと西田は山口時代に書いていた。『善の研究』においても、「詩人」ないし「美術家」・「芸術家」は、「学者」・「科学者」よりも実在の真相をつかみとる(「直覚」する)ことができるという立場が表明されている(西田全集一卷四九―五〇、七〇頁)。

ところで、山口時代に西田は宗教の中心を知情意のうちの「情」、すなわち「感情」に置いていた。『善の研究』では、第一編で、知(思惟、学問)と意(道德)とを統合するものとして「知的直観」が置かれ、第四編の中では、「知識」と「意志」とを「支える」ものとして「信念」が置かれている(西田全集一卷一四二頁)。宗教が位置づくのはこの「知的直観」や「信念」の位置である。知と意とを統合するものを、山口時代は、「知情意」からの消去法で残った「情」に見出していたのかもしれない。

ただ、一方で、『善の研究』は、知情意のうちの「意志」を中心とする立場を

しばしば表明している。たとえば次のように書かれている。

「元来我々の意識現象を知情意と分つのは学問上の便宜に由るので、実地に於ては三種の現象あるのではなく、意識現象は凡て此方面を具備して居るのである(例へば学問的研究の如く純知的作用といつても、決して情意を離れて存在することはできぬ)。併し、此三方面の中、意志がその最も根本的な形式である。」(西田全集一卷四九頁)

ここでは知情意のうち「意志」がその最も根本的な形式である」とはつきりと表明している。それはショーペンハウアーからの影響なのかもしれない。「感情」というものにはあまり言及しなくなっているようである。実は、『善の研究』の思想体系の中で中心をなすのは「意志」なのか「知的直観」なのかは揺れているのではないかとも思われる。

山口時代に、宗教の本質が「知識」ではなく「感情」にある、しかも絶対へと一体化する感情にある、と考えていた西田は、やがて自分に近い思想をウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』に見出すことになる⁸⁸。山口時代は、そのような思想的出会いの前段階ではあるが、以上見てきたように、この時代の宗教観あるいは神観は基本的には『善の研究』に継承されていくと考えるのであり、『善の研究』の思想的萌芽は山口時代の論文「山本安之助君の『宗教と理性』と云ふ論文を読みて所感を述ぶ」に確認できるのである。

註

引用にあたって、新字体・現代仮名遣いに表記の仕方を改めたところがある。「」内は引用者による挿入である。『西田幾多郎全集』全二四卷(二〇〇二―二〇〇九年、岩波書店)を「西田全集」と略記する。

- (1) 西田の伝記の中で山口時代に踏み込んでいるものとして、竹内良知『西田幾多郎』(一九七〇年、東京大学出版会)、一三五―一四九頁、上田久「祖父 西田幾多郎」(一九七八年、南窓社)、九八―一一頁、遊佐道子「伝記 西田幾多郎」(『西田幾多郎選集』別巻一、一九九八年、燈影舎)、九〇―一一〇頁、がある。
- (2) 『山口高等商業学校沿革史』(一九四〇年)。
- (3) 上田久は、山口で西田が「初め学校では講師として、英語、ドイツ語を教えたが、後、倫理をも担当し」(傍点引用者)と書いている(上田前掲書、九八頁)が、『山口高等商業学校沿革史』には「倫理」ではなく「論理」と書かれている。
- (4) 『精細山口縣中地圖』(一八九五年)。29―31頁に掲載した現在の山口の地図と比

較していただきたい。

- (5) 旧西田全集(『西田幾多郎全集』第十八巻、一九五三年、岩波書店、四七頁)では、「山口県山口町大字米屋町十番地阿部太兵衛方」(傍点引用者)と書かれており、新版の「十五番地」とは異なっていた。石川県西田幾多郎記念哲学館にこの書簡の現物が保管されており、これを閲覧して、旧版の「十番地」ではなく新版の「十五番地」が正しいことを確認してきた。旧版の誤記が、それに依拠した上田久の叙述を混乱させたのかもしれない。資料閲覧に際して、学芸員の山名田沙智子氏にお世話になった。

- (6) 『昭和42年度 住居表示旧新対照表(山口市)』、一一三頁。

- (7) 写真は32頁33頁にまとめる。すべて筆者撮影。

- (8) 上田久、前掲書。

- (9) もともと隣家(米屋町十三、十四番地)に住み薬屋を営んでいた吉田家が、昭和の初めに米屋町十五番地の土地・家屋(もともと旅館だった)を購入し、昭和十年より「太陽堂旅館」を始めたそうである。西田が住んでいたのは、一番奥の二階家の二階らしいが、昭和三十年の火災により焼失したという。この近辺の昔の状況について、吉田豊氏(太陽堂旅館ご主人)、吉田恭子氏、山口富美子氏(山口病院)、小澤淳子氏(野上屋)、山本恵一郎氏(米屋町振興会)にお話を伺った。ご協力に感謝いたします。

- (10) 参考のため、『都市地図 山口県1 山口市・防府市』(二〇一四年、昭文社)より、「山口市中心図」(五千分の一)、「山口市中心部」(一万五千分の一)、「山口市全図」(八万分の一)の一部を転載する。本稿で出てくる地名が確認できる。「現在の山口の地図1」(29頁)では、米屋町、太陽堂旅館、相良小路、県立美術館、一の坂川、下堅小路の位置がわかる。「現在の山口の地図2」(30頁)ではさらに、常栄寺庭園(雪舟庭)、瑠璃光寺、聖サビエル公園(金古曾)、姫山の位置がわかる。「現在の山口の地図3」(31頁)ではさらに、湯田温泉、赤妻町、狗「犬」鳴の滝(仁保)、錦鶏の滝、鼓の滝(龍蔵寺)、鳴滝(泰雲寺の近く)、防府天満宮、西鳳翩山、東鳳翩山、西方便山、東方便山の位置がわかる。地図中、上記の地名を赤丸で囲む。地図の転載にあたり、昭文社の許可を得た(地図使用承認©昭文社第五六G〇二七号)。

- (11) 西田の書いている「方便山」とはどの山のことが、検討してみた。

山口市には、萩との市境に西鳳翩山(七四一、九メートル)と東鳳翩山(七三四、二メートル)、大内に西方便山(二三五、一メートル)、宮野と仁保の境に東方便山(三三九、八メートル)がある。

山口県立山口図書館で調査したところ、明治四十四年発行の山口県の地図(五万分の一)にはすでに「西鳳翩山」・「東鳳翩山」の名称が記載されている。しかし、明治の地図には「西方便山」・「東方便山」の該当箇所にはこれらの名称はなく、これらの名称が記載されるのは昭和四十六年以降発行の地図である。また、昭和二十五年に山口市役所が発行した「山口市全図」では、今の「西鳳翩山」・「東鳳翩山」

が「西方便山」・「東方便山」と記載されている。

これらを考え合わせると、明治の頃に「ほうべんざん」と言えば「西鳳翩山」と「東鳳翩山」であり、それらが便宜上簡略化されて「西方便山」と「東方便山」と記述されることもあった、と推測できる。そして、西田が「方便山」と書いているのは「西」か「東」かという問題が残るが、一般に山口市民に登山で親しまれてきたのは「東鳳翩山」であることを考慮すれば、西田が行ったのも「東鳳翩山」だと考えるのが順当だと思う。

- (12) 表紙裏の決意表明は、明治三十(一八九七)年の日記にもあるが、明治三十一年の決意表明は明治三十年の決意表明に比べて「いちじるしい禅的色彩をおびている」ことを竹内良知が指摘している。竹内前掲書、一三八頁。

- (13) 竹内前掲書、一四一〜一四二頁。

- (14) 戸川秋骨「その頃の人達」(同『随筆集』自然・氣まぐれ・紀行、一九三一年、第一書房、三〇一〜三〇五頁)。「学問より、人間が大事だ……人格あつての学問である……学問の奥義は人格にあり、人格が立派であれば、学問が良いに極つて居る」、西田君は昔から「偉い人」だった、と戸川は書いている。

- (15) 手塚富雄「ニーチェの人と思想」(同、責任編集『中公バックス 世界の名著 57 ニーチェ』、一九七八年、中央公論社、所収、五三頁)。

- (16) 山本良吉は、このとき静岡県尋常中学校の教諭と寄宿舎舎監を務めている(明治三十年四月より三年間)。明治三十一年九月に結婚。山本はのちに京都帝国大学学生監、学習院教授、武蔵高等学校長などを務める。上田久「山本良吉先生伝——私立七年制武蔵高等学校の創成者」(一九九三年、南窓社、参照)。

- (17) 「人か深く深く心の奥を探りて真正の己を得て之と一となるの時あらは たとひ其時間一分時なり(と)も其生命は永久ならん」という立場は、『善の研究』で「活動説」という倫理学説において言及される「至誠」の立場と同じだろう。

- (18) この考え方は仏教に一般的な考えであるとともに、ショーペンハウアーの考えでもある。西田がショーペンハウアーへの高い評価を表明するのは、約五年後のこと(西田全集十九巻六三頁、参照)だが、人間が絶えず欲望に駆り立てられているという洞察と、それゆえ執着のものを断つべしというショーペンハウアーの考えに、もともとそういう思いを抱いていた西田は親近感を抱いたのであろう。

- (19) 西田が英文で挙げている部分(『マタイによる福音書』第六章第二七節)は今日の『聖書(新共同訳)』(一九八七年、日本聖書協会)では、「あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」と訳されている。しかし、佐藤研訳『マルコによる福音書 マタイによる福音書』(一九九五年、岩波書店)では、「あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、自分の背丈を一尺ほども伸ばせるであろうか。」と訳されている(一一六頁)。後者は西田が理解していたのと同じ趣旨である。大正六(一九一七)年から昭和二十九(一九五四)年まで広く愛用された『文語訳』でも、「汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。」と訳されていた(『文語訳 新約聖書 詩篇

付、二〇一四年、岩波文庫、二二頁。

(20) 上田久前掲書、一〇七―一〇九頁、遊佐前掲書、九六―九七頁。

(21) 狩谷平司『ビリヨン神父の生涯』(一九三八年、一九九六年大空社により復刻)。

(22) 大聖寺という寺院が現存しているわけではなく、大聖寺は地名である。今は石川県加賀市に属する。かつては加賀前田家の分家(支藩)、大聖寺藩の城下町として栄えた。JR北陸本線に「大聖寺」という駅がある。昔は特急が停まって賑わっていたらしいが、昭和四十五年に隣りに「加賀温泉」駅ができ、そこが山代温泉や山中温泉へのターミナルとなってからは、大聖寺駅は普通列車しか停まらない駅になった。町の四方が山々に囲まれて落ち着いているところが、たしかに山口と似ているとも言える。山口も随分のんびりとした町だが、今の大聖寺は、山口よりもずっとひっそりとした町である。

(23) 上田閑照『西田幾多郎——人間の生涯ということ』(一九九五年、岩波書店、三―五頁)。

(24) 西田の日記によれば、一八九八年一月七日、坐禪の修行のために京都に来ていた西田のもとを山本安之助が来訪している(西田十七卷三〇頁)。山本安之助はのちに一九二二年から一九三七年まで京都府立京都第一中学校の校長を務めた。

ちなみに、この京都第一中学校が「京都府尋常中学校」と称していた時代、その第二代校長(一八八八―一八九〇年)は清沢満之(一八六三―一九〇三年)、第三代校長(一八九〇―一八九三年)は稲葉昌丸(一八六五―一九四四年)であった。稲葉はその後、山口高等学校に移り、動植物、地質及鉱物、ドイツ語を教える。西田とはそこで同僚であった。山口時代、二人は頻繁に行き来している。山口滞在中の西田の日記に稲葉の名は四十七回登場する。西田は一八九九年の山本良吉宛て書簡で

「山口にて余が信し居る人は稲葉昌丸なり 此人は一見温厚之君子の如く可もなく不可もなきか如きも中に確実なる所あり 相信すへき良友なり」と書いている(西田十九卷五三頁)。稲葉はのちに大谷大学長を務める。

(25) 山本安之助「宗教と理性(上・中・下)」(『無尽燈』第三卷第二号、一―六頁、同第三号、一―一六頁、同第五号、一―一二頁、一八九八年)。

(26) 西田幾多郎「山本安之助君の『宗教と理性』と云ふ論文を読みて所感を述ぶ」(『無尽燈』第三卷第六号、一―八頁、一八九八年)。

(27) 原文では「信條」だが、現代的表記に改める。以下同様。

(28) ユニテリアンは、キリスト教正統派の三位一体論に反対し、神の単一性を主張し、イエスの神性を否定する立場をとった。

(29) 教義・教理という「信条」よりも、その元となる主體的な感得としての「信念」が重要であるという西田の宗教観は——ショーペンハウアーやジェイムズと類似するとともに——次のようなヤスパースの宗教観にも近いと言える。ヤスパースによれば、これまで神について語られてきたことは所詮、歴史的な制約を伴った「象徴」にすぎず、絶対化できるものではない。いずれの宗教をも絶対化しない

形で、いずれの宗教も共通に担ってきたものをヤスパースは「信仰」と呼んでいる。

「今日の状況が要求しているのは、我々が、ひとつのより深い根源(Ursprung)、すなわち、すべての信仰が特殊な歴史的な姿をとってかつてそこから発した、その源泉、もし人間がその源泉を受け容れる心構えをしていけば、いつでも流れ出る、その源泉に立ち帰らなければならない、ということである。」(Karl Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, 1949, München: Piper, S. 267, 重田英世(訳)『ヤスパース選集 9 歴史の起源と目標』、一九六四年、理想社、三九〇頁)

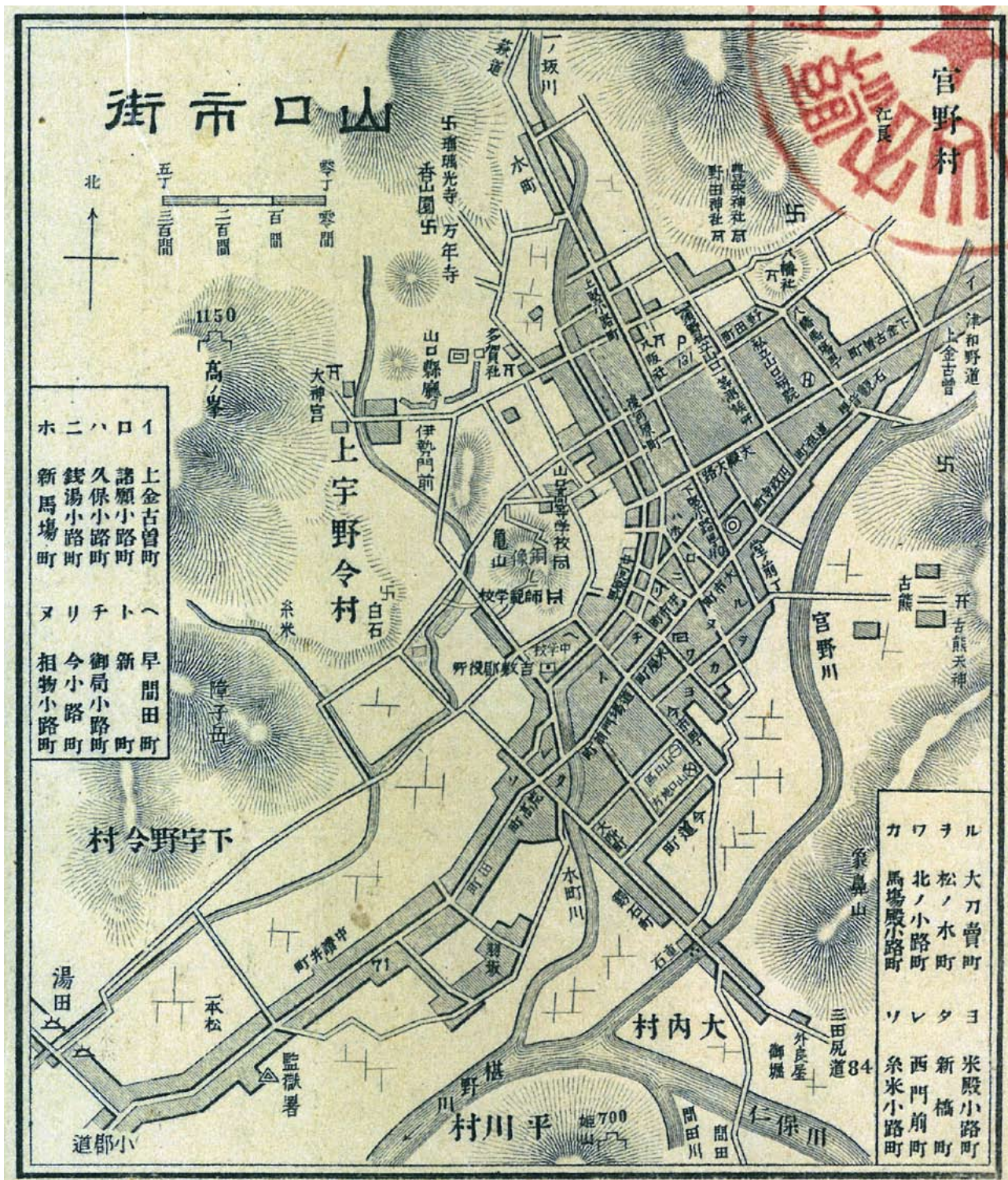
「信仰(Glaube)とは、或る特定の内容や教義のことではない。教義は、信仰の一つの歴史的な姿の表現でありうる。しかしそれは、欺くものでもありうる。信仰は、人間の根底において充実させているもの、動かしているものであり、この根底において人間は、自己自身を越えて、存在の根源と結ばれている。」(Eberhard, S. 268, 重田訳三九二頁)

(30) 山口時代の西田の日記には、西田から鈴木に手紙を送ったという記述が六回、西田が鈴木から手紙を受け取ったという記述が三回、見出せる。

(31) 西田が山口時代に受け取ったと考えられる書簡が十七通、『鈴木大拙全集』第三六卷(二〇〇三年、岩波書店)に収められている。

(32) 同書、一六三頁。

(33) ジェイムズの著作を西田に紹介したのは在米の鈴木大拙であった。西田幾多郎がウィリアム・ジェイムズの思想の中のどのようなところに共感し、どの点では批判的であったかについては、拙稿「西田幾多郎の『善の研究』とウィリアム・ジェイムズ」(日本宗教学会編『宗教研究』第三六二号、二〇〇九年十二月、四九―七一頁)において考察した。



明治28年作成の山口の地図



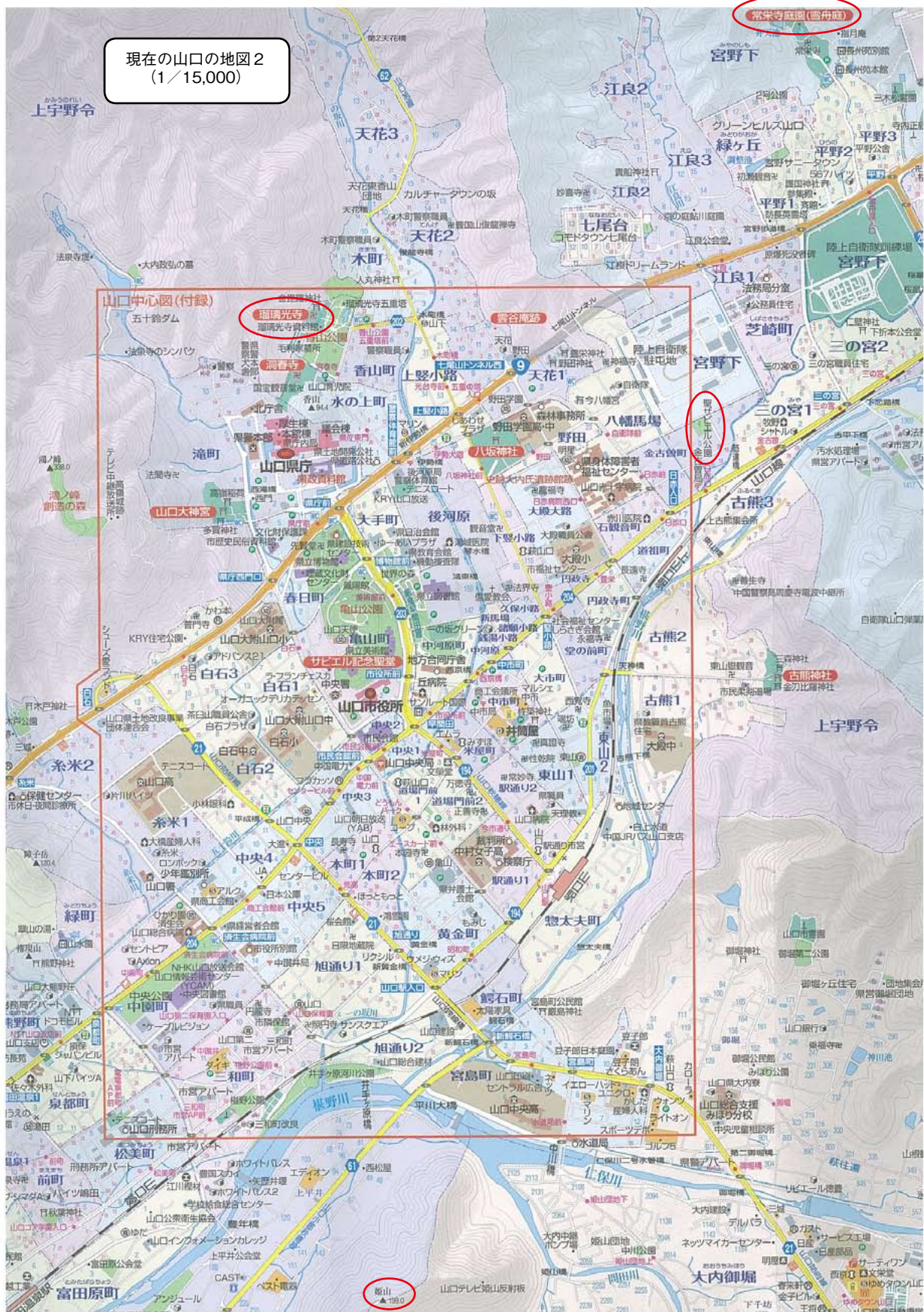






写真1 旧「米屋町十五番地」付近



写真2 豎小路の岡部家



写真3 常栄寺、雪舟庭

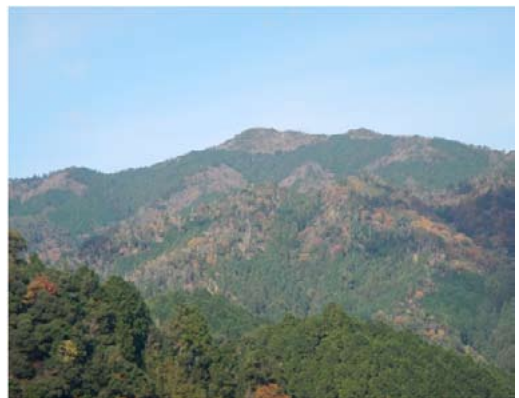


写真4 東鳳翔山



写真5 龍蔵寺、鼓の滝



写真6 鳴滝



写真7 錦鶏の滝、雄滝



写真8 赤妻古墳跡

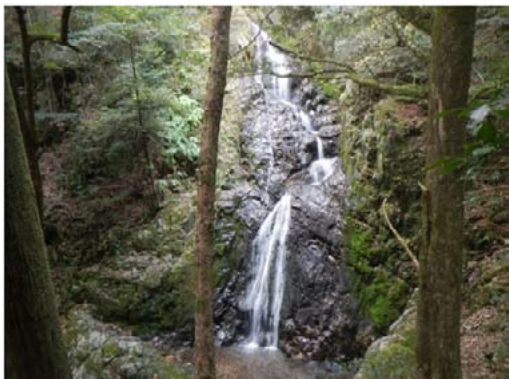


写真9 犬鳴の滝



写真10 瑠璃光寺、五重塔



写真11 一の坂川



写真12 金古曾のザビエル記念碑

Kitaro Nishida during his stay in Yamaguchi

Michihiro YOKOTA

Abstract

Kitaro Nishida (1870-1945), a philosopher, served as a teacher at Yamaguchi-Kotogakko, a college under the old system, from 1897 to 1899. In this article, I will explore how Nishida lived and what he contemplated during his stay in Yamaguchi. In the first section, I explain about the school where he worked and discuss where he lived. Then, I will inquire into his diaries, letters and articles, in the second, third and fourth sections respectively.

Reading his diaries during his stay in Yamaguchi, you gain a strong impression of his will, which he used to focus his consciousness as part of his Zen training to live an ascetic life. He also enjoyed climbing mountains, seeing waterfalls and playing a kind of football. His daily experience in nature and his practice of contemplation provided a context for his ideas about experience and the knowledge of reality.

In the sixteenth century, Francis Xavier visited Yamaguchi. He spent more time propagating Christianity in Yamaguchi than anywhere else he visited in Japan. In the Meiji Era, Amatus Villion, a missionary, searched for the place where Xavier lived and found it in 1893. According to Nishida's letter to his friend, while he was in Yamaguchi he was deeply impressed by the words, "Which of you by taking thought can add one cubit unto his stature?" which is written in the sixth chapter of *The Gospel according to Matthew*. This helped him get rid of his dissatisfaction and complaints and feel easy and peaceful.

Yasunosuke Yamamoto published an article in 1898 called "Religion and Reason". According to it, every religion has its own >creed<, which is identified with a dogma. Men who believe the creed have >beliefs<. The emotions that drive us to seek spiritual peace hinder the development of reason in a religion and so men accept a creed blindly and irrationally. Yamamoto expressed a view that we should not be restrained by our >emotions< and should develop our >reason< in our religion.

Nishida objected to Yamamoto's view of religion. In the same year, he published an article, "My comment on Mr. Yamamoto's article titled 'Religion and Reason.'" He says, "It is not true that a creed precedes a belief, but it is true that a belief precedes a creed." We can escape from the limited world, go into the unlimited world, unify with the Absolute and experience "the reason why the reality of the active universe as a whole is what we see." Nishida called this kind of >intuitive understanding< a >belief<, which is most important for him. The >belief< is originally beyond words but becomes expressed as a >creed< with concepts and words, which is not so important for him. His view of religion attaches greater importance to the intuitive and emotional understanding than to the only intellectual knowledge and understanding.

Nishida found in the center of religion a desire to escape from the limited world and unify with the Unlimited. He regarded God not as transcendent out of the cosmos but as working immanently in the midst of the cosmos. Such a view of religion during Nishida's stay in Yamaguchi was expressed also in *Study on the Good (Zen no Kenkyu)* which was published in 1911.

論文要旨

哲学者、西田幾多郎(1870～1945年)は、明治30(1897)年から明治32(1899)年まで、旧制の山口高等学校の教師を務めた。本稿は、山口時代の西田がいかに生き、いかに思索していたのかについて考察する。第一章では、西田の職場である「山口高等学校」とはどのような学校なのかを述べ、そして、西田が山口のどこに住んでいたのかについての情報を整理する。そのあと、彼の日記・書簡・著作に順次目を向ける(第二・三・四章)。

山口滞在中の彼の日記には、禅の修行、そして自分の生活を禁欲的に律することへと意識を集中しようという決意がみなぎっている。その一方で、山に登ることや滝を見ることやサッカーをすることを楽しんでいる。そのような日常の経験が彼の思索の背景にある。

山口は、16世紀にフランシスコ・ザビエルが日本で最も長い期間滞在し布教した土地であり、1893年、ヴィリオン神父の尽力によって、ザビエルの住居の場所が発見された。西田が友人に宛てた書簡によれば、彼は山口で「マタイによる福音書」第六章の「あなたたちのうちの誰が、思い煩ったからといって、自分の背丈を一尺ほどでも伸ばせるであろうか」という言葉に感動し、それによって、いろいろな不満が解消し、心が安らかになったという。

ところで、山本安之助は「宗教と理性」という論文を1898年に発表した。それによれば、いずれの宗教にも「信条」(教理)があり、信者はこれを信仰する「信念」をもっている。安心を求める感情が、宗教において理性が働くことを阻害し、人々は盲目的・非合理的に信条をうけ入れる。山本は、宗教において、「感情」に束縛されずに「理性」を働かせなければならないという「啓蒙」的な主張を表明している。

この山本の宗教論について西田は反発し、同じ年、「山本安之助君の『宗教と理性』と云ふ論文を読みて所感を述ぶ」と題する論文を発表する。西田は「信条ありて而して後信念あるにあらず、信念ありて而して後信条あるなり」と言う。つまり、彼にとって何より大事なものは、有限界を脱して無限界に超越して絶対的なものと一体化し、「宇宙実在が全体として活動する所以のもの」を「感得」することとしての「信念」であった。「信念」が概念化され言葉となった「信条」はそれほど重要ではない。宗教において、このような「感得」や「感情」を重視する一方で、「智識」や「理解力」は重視されない。

有限世界を脱して無限なる力に合一することを宗教の中心に置き、神はこの宇宙の外に超越しているのではなく、この宇宙のただなかで働いていると考える西田の山口時代の宗教観は、1911年に発表される『善の研究』でも継承されることになる。